非行少年の自伝的記憶の想起が持つ意味に関する研究
― 一般少年との作文の文体比較から ―

松　嶋　秀　明

【問　題】

非行少年の問題として，過去の出来事との関わり方の問題が指摘されることが多い。例えば，時間的展望研究においては，非行少年の過去や未来の出来事とのかかわり方が，我々のそれとは異なることが示唆されている。例えば，時間的展望研究において，大橋，鈴木（1988）は，非行少年の時間感覚の特異性を質問紙調査から見い出している。河野（1994）も，上述の知見を確認するとともに，非行少年は一般少年より未来に対して楽観的な推測をすることを見い出している。可能自己研究においても，Oyserman & Markus（1991）は，非行少年は予期自己と不安自己のバランスがとれておらず，過去や現在の状態にもとづかない，漠然とした明るい将来を抱きがちであるとしている。直接に過去の記憶を扱っていないとはいえ，こうした研究結果は，非行少年の過去の出来事とのかかわりが，我々のそれとは異なっていることを示している。非行少年に過去を振り返って文章を書かせることが，矯正施設における課題の一つとなっている（大橋・大橋；1989）ことからも，非行少年に関して，過去との関わり方をとりあげることは非常に重要であると考えられる。

ただし，従来の研究には２つの問題点がある。第一には，非行少年を測定する手法の問題が挙げられる。同じ質問項目を用いても，各集団において課題が同様な意味づけをされていなければ，それを同様の基準から解釈することはできない。従来の研究で用いられる質問紙には，非行少年が自由に回答できる余地が少なく，課題に回答することの意味を検討できなかった。　第二には，非行少年の問題を彼らの能力へ帰属することに対する問題である。従来の研究では，対象となった少年が回答をおこなう鑑別所という場の特殊性は，測定結果を歪めるものとしてのみ問題にされてきた。これは非行少年の問題を，それを取り巻く社会的状況から切り離し，個人の能力の問題をして捉えようとする態度の現われである。これに対して，麦島（1990）は，非行少年の問題が，それをとりまく他者との関係において捉えられる必要があるとしている。現実の非行少年の問題が，我々処遇者と非行少年との間で生じてくる問題であることから，現実の非行少年を記述しようと思えば，従来の問題が切り捨ててきた社会的文脈こそが重要になってくると思われる。

自由記述で過去の出来事を記述するという課題を用い，それによって得られた文章を，想起場面における聞き手との相互作用（Edwars & Middeleton, 1986；Wooffitt, 1992），または，過去の出来事との関わりかた（松島，1996）を明らかにしているナラティブ分析をもちいて分析することが有効である。本研究においては，非行少年の過去の出来事との関わり方を，自由記述をナラティブ分析によって調べることにする。

【目　的】

非行少年が社会的文脈において，過去といかにかかわっているかについて，過去の出来事の記憶の自由記述についてのナラティブ分析から探ることを目的とした。

【手　法】

非行少年として，少年鑑別所に入所中の少年67人（男子61人；女子６人）が選ばれた。うち累犯者は17人で，平均年齢は16.2歳であった。一般少年は，国立大学附属高校に在籍する少年92人（男子35人；女子57人）であり，平均年齢は16.2歳であった。就学期間は一般少年のほうが長かった。被験者には「一年以上前を思い出して回答してください。みなさんは，これまでの生活で，いろんな出来事を体験をしてきたと思います。そういう出来事の中には，あなたがわすれられないような，大切な出来事もあったことでしょう。今回は，そういう，あなたが大切だと思っている出来事のなかで，今でもよくおぼえている出来事を３つ思いだして，どんな出来事だったのか，できるだけ詳しく，自由にお話ししてください。」との教示文にしたがい，３つの出来事の自由記述が求められた。３つの出来事は，それぞれ異なる回答欄に記入するように求められており，順にエピソードＡ，Ｂ，Ｃと命名された。また，自由記述を補う目的で，各エピソードにつき８つの補助質問が添付された（分析に際して全ての補助質問が使用されたわけではない）。

【分析に関する説明と，その結果】

(1)　作文の産出量に関する分析

文字数と，先行研究で文章の単位として用いられることの多いアイデアユニット（秋田・大村；1987）の数を指標として，文章の産出量の分析が行われた。メディア

ン検定の結果，非行少年の方がやや多くの文章を産出していた。また，フリードマン検定の結果，いずれの少年もエピソードの経過に従って産出量は減少していた。

(2) 時間経過表現の分析

時間経過を表わす表現に注目し，文章の構造化に関する分析をおこなった。表現は，出来事の間にある物理的な時間のつながりを表わす「暦的時間」と，出来事の間にある因果的なつながりを表わす「因果的時間」に分けられた。前者が多く用いられていれば，より簡単な文章の書き方であると仮定されていた。χ^2検定の結果，時間経過表現をエピソード中に使用した人数には，両少年に差は見られなかった。しかし，フリードマン検定により，非行少年の男子だけは，より多くの人物が暦的時間経過に関する表現をもちいていることが明らかになった。

(3) 非行少年に特有の語りのパターン

作文を通読した結果，非行少年が過去の出来事を，予測不可能で，自分が関与しないところで起こったものとして語る傾向があるという印象がもたれた。この語りのパターンは「不可抗力の出来事の語り」と命名された。これは「急に母が体調をくずして」「知らない人にいきなり追いかけられた」といったように，「急に」，「いきなり」をふくむ文章，「わけもわからずなぐられた」といったように，「なぜか～」や，「～とは知らず」というような，理解できない出来事だったことを表現した文章，そして，「～してしまった」という語尾をもちいて，語られた出来事に対して主体が積極的に関与していないことを示す表現の3つの下位分類から構成されていた。χ^2検定の結果，いずれの下位分類においても，より多くの非行少年が，この語りを用いていることが示された。加えて事例検討から，これが非行少年の生活体験の特殊性，書き言葉の未熟さとしては解釈され得ない，特異な文体であることが示された。

(4) 受け身表現の分析

「不可抗力の出来事の語り」の分析に引き続き，被害的な受け身表現「～られる」と，受益的な受け身表現「～くれる」に注目して分析が行われた。受け身表現が多く用いられていれば，過去の出来事を自己中心的な視点から語っていると仮定された。メディアン検定の結果，いずれの表現も，一つのアイデアユニット中の使用頻度には差がなかったが，χ^2検定の結果，表現を用いた人数は非行少年の方が多かった。事例検討の結果，非行少年の男子が「～くれる」表現を多く用いていることから，非行少年が自らをよくみせようとしている可能性も示唆されたが，全体として非行少年が自己中心的視点で外界を体験していることを表わすと解釈された。

(5) 丁寧表現の分析

課題をどの様な活動として行っているかを調べるため，「～です，ます」で表わされる丁寧表現の分析を行った。丁寧表現を用いていれば，書き手は読み手を意識しており，自分をよくせようとしていると仮定された。丁寧表現で語る人数に関してのχ^2検定の結果，一般に比べて多くの非行少年が丁寧表現を使用して書いていることが明らかになった。しかし，丁寧表現をもちいる人物の数に関する分析では，累犯少年と初犯少年とのあいだに差はみられなかった。

(6) 現在形表現の分析

丁寧表現の分析と同様の目的から，過去形で書かれた文章のなかに混入された現在形表現に注目して分析を行った。現在形表現を多く用いていれば，読み手を意識し，＜いま―ここ＞における語りをしていると仮定された。現在形表現を使用した人数に関してのχ^2検定の結果，より多くの非行少年が現在形を混入させて書いていることが明らかになった。また，累犯と初犯の比較では，累犯の方が多くの現在形表現を用いていた。

【考　察】

産出量と，時間経過表現に関する分析において，非行少年が一般少年よりも多くの産出量を示しながらも，時間経過表現の分析から，簡単な文章構成をしている事が明らかになった。このことは，非行少年は文章を書くことが本来的に苦手であり，鑑別所という場において頑張って文章を産出していることを示すと解釈された。「不可抗力の出来事の語り」および受け身表現の分析からは，非行少年が過去を自己中心的な視点から，外界を予測できないものとして書いていることが示された。これは，非行少年の能力に帰属した説明が妥当であることを示唆しているようにも思われたが，続く丁寧・現在形表現の分析結果から，非行少年が一般少年とは対照的に，読み手を意識し，＜いま―ここ＞の状況を作り出していることも同時に示された。このことから，非行少年と一般少年の課題に対する意味づけは異なっており，両者の結果を能力の差によって説明することは可能ではなかった。丁寧・現在形表現の分析の結果についてのさらなる検討から，一般少年の過去が他者を意識せずとも自律的に存在するものであるのに対して，非行少年の過去が，他者の要請に応えて刹那的に作り上げられたことを示唆するとも解釈された。これは臨床実践で報告される非行少年像とも共通するものであり，本研究の解釈が妥当なものであることが伺われた。